

実需者ニーズに対応した大豆生産

主任研究員 佐藤孝一

1 はじめに

平成25年産の国産大豆の入札取引が間もなく始まるが、24年産の国産大豆の入札取引は25年7月で終了した。24年産は収穫量が例年と変わらないものの、入札当初から、納豆用大豆を除いて高値で落札され、特に九州のフクユタカや日本海側のリュウホウ、おおすずは入札のたびに値が上がってきていた。大豆問屋によれば、輸入大豆の価格高騰や品不足のため、国産大豆に切り替えるメーカーが増えたことによる。最終的に入札取引価格は1万円/60kg近くまで上昇した。

以下では、国産大豆の入札取引価格や品種別作付状況を概観し、実需者ニーズに対応した生産について検討する。

2 入札取引価格の推移

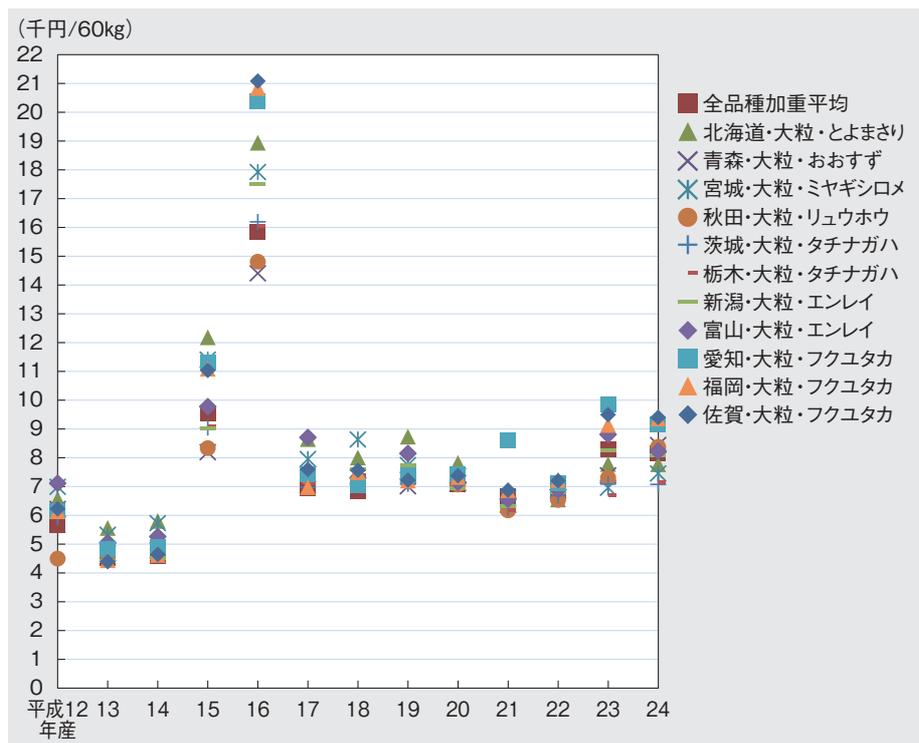
国産大豆の取引形態は大きく分けて入札、相対、契約栽培の3つがある。集荷量の3分の1が入札に上場され、入札取引価格が契約栽培での取引価格の指標となっている。第1図は、国産大豆の主な産地銘柄別の入札取引価格の動向をみたものである。現行の入札取引が開始された当初の平成12年～14年産は低水準にあった。その後平成15年産および16年産は、不作により価格が大きく高騰したが、落札平均価格は6,600～7,300円/60kgという水準で推移していた。平成23年産は東海地方の

産地の不作で価格が高騰したが、24年産は22年産で風評被害を受けて値を下げた東北産大豆も価格が回復してきた。これまでの産地品種銘柄別の入札取引価格の推移をみると、引き合いのある銘柄とそうでない銘柄との格差が生じ、1,000～2,000円/60kgの価格差がついてきている。すなわち、産地品種銘柄間に価格差が生まれるようになってきた。

3 主な品種別の作付状況

次に、第1表に平成12年、17年、22年における国産大豆の主な品種別の作付状況を示した。22年において作付面積が最も大きかった品種は、フクユタカ、次いでエンレイ、タチナガハ、リュウホウ、ユキホマレの順になっている。これらはいずれも国産大豆の用途として大きい、豆腐用、煮豆用の品種である。

第1図 大豆入札取引価格の推移



資料 公益財団法人日本特産農産物協会「大豆入札取引結果」(各年産)から作成

第1表 品種別作付面積

平成12年				17年			22年			(単位 ha、%、年)
順位	品種名	作付面積	シェア	品種名	作付面積	シェア	品種名	作付面積	シェア	登録年
1	フクユタカ	22,873	18.7	フクユタカ	30,969	23.1	フクユタカ	33,350	24.2	1980
2	エンレイ	15,836	12.9	エンレイ	14,847	11.1	エンレイ	17,358	12.6	1971
3	タチナガハ	9,218	7.5	タチナガハ	10,207	7.6	タチナガハ	11,185	8.1	1985
4	タマホマレ	6,390	5.2	リュウホウ	8,033	6.0	リュウホウ	10,569	7.7	1995
5	スズユタカ	6,376	5.2	スズユタカ	4,892	3.7	ユキホマレ	9,540	6.9	2001
6	むらゆたか	5,460	4.5	いわいくろ	4,220	3.1	ミヤギシロメ	4,383	3.2	1961
7	リュウホウ	4,834	3.9	ミヤギシロメ	3,963	3.0	おおすず	4,102	3.0	1998
8	トヨムスメ	4,171	3.4	おおすず	3,554	2.7	サチユタカ	3,817	2.8	2001
9	ミヤギシロメ	3,960	3.2	トヨムスメ	3,349	2.5	タンレイ	3,391	2.5	1978
10	丹波黒	3,843	3.1	サチユタカ	3,329	2.5	スズマル	2,985	2.2	1988
	全体	122,500	100.0	全体	134,000	100.0	全体	137,700	100.0	—

資料 農林水産省「大豆に関する資料」から作成

また、平成12年からの推移をみると、作付面積上位のフクユタカ、エンレイ、タチナガハの作付シェアは、平成12年の39.1%から、17年は41.8%、22年には44.9%まで上昇している。これら作付面積上位3品種に変化がみられないだけでなく、作付シェアが高まってきているのは、この上位3品種に代替できる品種が見当たらなかったことによる。一方で豆腐用、煮豆用など用途ごとの新品種の育成もされており、22年の作付面積4位のリュウホウは、平成7年に品種登録され、その後作付面積を伸ばし、22年には10,569haと、第3位のタチナガハの作付面積に迫るまで増加している。

4 実需者ニーズに対応した生産の取組み

国産大豆の入札取引価格の推移と品種別作付状況を合わせてみると、フクユタカ、エンレイ、タチナガハといった作付面積が大きい品種は、用途として需要量が多い豆腐用、煮豆用であり、売れる品種とみられる。その意味では、実需者ニーズにあった品種の作付けが行われている状況にあると考えられる。

しかし、大豆生産の振興を図る上では、単に実需者ニーズに生産を合わせるだけではなく、需要を新たに開拓することによってその地域の栽培状況に沿った形での大豆の生産を行っていくことも重要である。

JAと共同して、地元の大豆加工業者がこれまであまり使用されていなかった品種の大豆で豆腐を製造するなどの取組みもみられ、地

域内連携による需要開拓を行う取組みも図られている。こうした取組みでは一定の地域内で実需者と生産者が接点をもった上で商品開発を行うことにより、実需者の求める品種や品質を十分把握した上で生産者は生産を行うことができる。

大豆の品種には、上記のようなフクユタカ、エンレイ、タチナガハといった主要な育成品種^(注)のほかに、赤大豆、秘伝豆、ダダチャマメといった在来品種がある。育成品種は在来品種に比べて、収量、品質等が改良され栽培しやすくなっているため、作付面積の9割以上を占めている。一方在来品種は、加工が比較的困難で収穫量も限られているため、取引形態は入札取引ではなく契約栽培での取引になり、大豆加工業者の求めに応じて生産者は生産を行うことになる。こうした各地域にある在来品種の大豆生産も実需者ニーズに合った生産の取組みの一つといえよう。

5 おわりに

消費者ニーズの多様化により、豆腐や納豆など大豆加工品の多様化も進んでおり、原料もそれらに合った品種や品質が求められている。生産サイドも、今後の需要を見据えて作付品種を変えていくことが必要である。作付面積が大きく収穫量も多い育成品種の大豆だけでなく、これまで埋もれてきた在来品種を使用した製品も差別化商品として販売されており、そうした在来品種の大豆を生産することも実需者や消費者ニーズに合った生産の取組みになる。

(さとう こういち)

(注)育成品種とは、品種改良によって開発された品種。